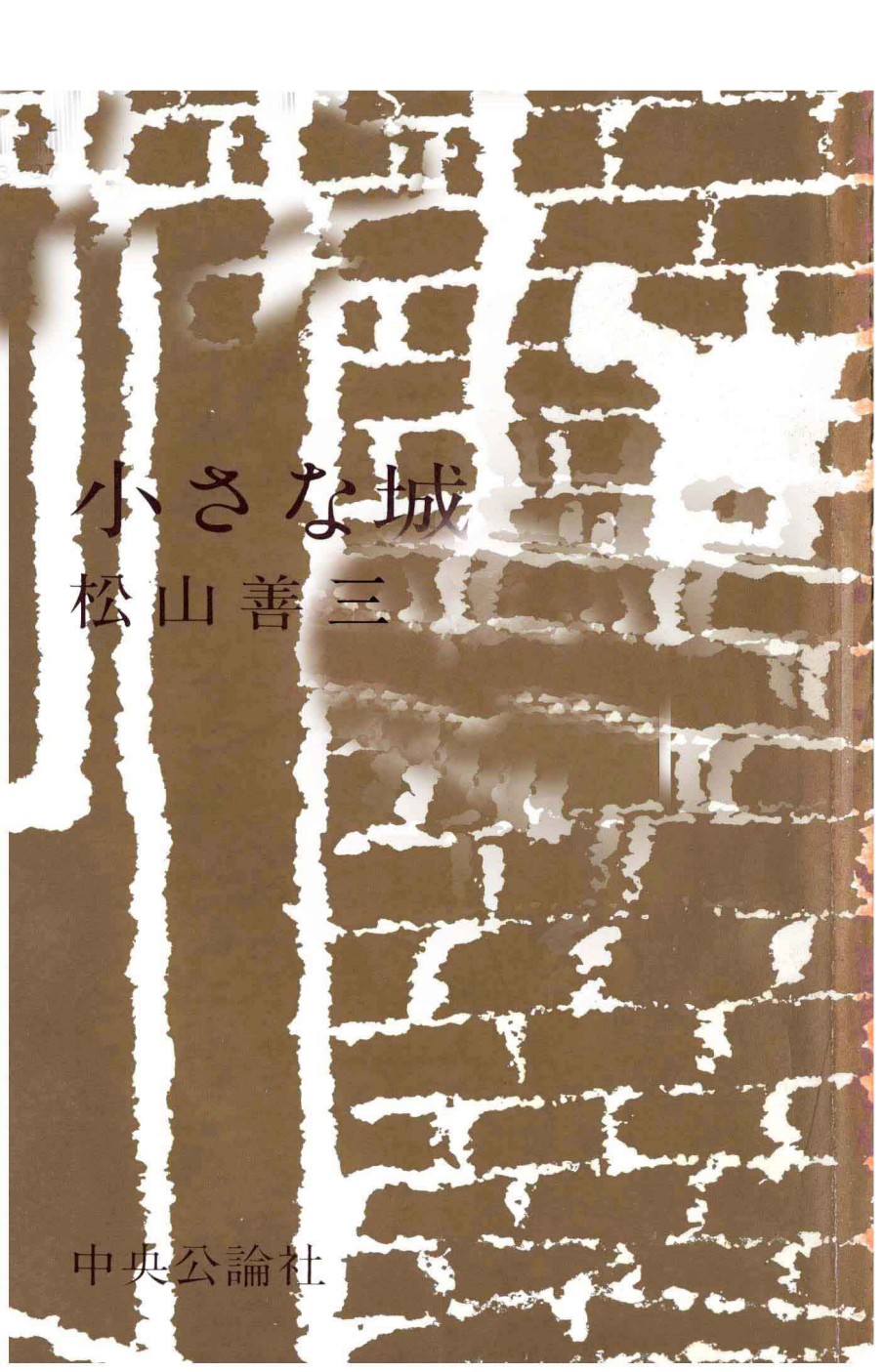




小さな城

松山善三

中央公論社

小さな城

©1964

著 者 松 山 善 三

昭和39年6月1日印刷

昭和39年6月10日発行

発行者 宮本信太郎

印 刷 中 央 精 版

発行所 中 央 公 論 社

東京都中央区京橋 2-1

電話 (561) 5921 (代表)

振替東京 34

定価 370 円

検印廃止

小
さ
な
城

第一章

「どうしましたか?」

と充血した子供の眼^{まなこ}から、その子を膝に抱いた若い女の顔へ視線を移した時、浩太郎はどきりとして、思わず顔を赤らめた。その人は、毎朝浩太郎が病院ゆきのバスに乗りこむ時、何人かの降車客に混って、きまつて最後に下車して来る女子学生の美しい横顔に、よく似ていた。浩太郎はまるで中学生のような淡い感情をその少女に抱いていた。名も知らぬその少女に会う期待から、浩太郎の日課ははじまっていた。

面長な顔、内巻きにカールされた髪型、眼も眉も優しく、肩も胸も薄い少女だが、バスのステップを飛び降りる時の敏捷な身のこなしは、ちらりと野性の逞しさを見せて、毎朝浩太郎の若い眼を楽しませてくれた。

その少女が、いま子供を抱いて浩太郎の前に腰かけている。そう錯覚して浩太郎は一瞬顔を赤らめたのである。人違いであった。

「ものもらいだと思うのですけど」

と、子供の顔を覗きこむようにして、その若い女は言った。浩太郎は平常な医局員にもどった。

「いつからですか」

「ゆうべから、とても痒ゆがって……寝ている間に掻きむしったらしいんです。今朝起きたら、もうこんなに腫れて……」

「おいくつですか」

「三ツです」

「以前に眼の病気をしたことがありますか?」

「いいえ」

「あなたはどうです。お母さんは?」

返事がない。浩太郎がカルテから眼をあげた。女はそれが癖なのか、白い前歯で下唇を噛んで小さく微笑んでいた。

「私、この子のお母さんじゃありません。姉です」

「そうですか、それは失礼」

「私、この子とあんまり年が離れているものですから、どこへ行っても母親と間違えられるんです。母は一昨年亡くなりました」

言われて見れば若過ぎる。診察室との境のカーテンを押しあげて、婦長の谷圭子が顔を覗かせた。

「長谷先生、あと何人ですか? 三宅教授は一時から教授会なんですから……」

「これで終わりです」

浩太郎はカルテを手にして椅子を立った。正午までという診療時間はとうに過ぎて、診察室の電気時計は一時十分前を指していた。時計の下の方の横長のテーブルに五台の赤外線照射器が並んでいる。洗滌や薬液の点眼を済ませた患者たちが、看護婦の指示に従って、同じ表情を見せて照射器にかがみこんでいる。ドウナッツ眼帯をかけた中年の紳士が、三宅教授の前から一札して立ち上った。

「やあ」

と、うなずいた教授は中腰のまますばやくカルテに横文字を書き入れ、そのペンを投げた。浩太郎が入って来た。

「長谷君、あとは君診てくれ給え」

三宅教授は浩太郎が差出したカルテを横目で睨んで席をあけた。

「ホルデオルンだと思えますけど、三歳の子供です」

「うむ。君頼むよ、教授会があるんだ」

「はい」

三宅教授が出て行った。

「野々宮さん、どうぞ」

と、谷婦長が膿盆を手にして、先刻の女と子供を診察室へ呼び入れた。野々宮と呼ばれた女は、子供を抱いて浩太郎の前の丸椅子に腰をおろした。

「もう少し前へ出て下さい。先生の膝とあなたの膝をベッ

ド代りにして、子供さんの顔を先生の方へ向けて下さい。暴れたら足をおさえて下さいね」

婦長は、子供の足を自分でおさえて見せた。浩太郎が子供の頭を抱いて、自分の膝の上に仰向けた時、子供はひきつたように身ぶるいして大きな泣き声をあげた。そして小さな足を激しくバタつかせた。浩太郎は突きあげてくる子供の手を婦長の手に渡すと、すばやくプロタゴールを点眼し、食塩水で浮腫した子供の眼を洗滌した。そして眼瞼を反転して見た。結膜下に豆粒大の結節が見える。

「ものもらいですね。やつぱり」

浩太郎がオーレオマイシンをガラス棒に受けた時、三歳の子供とは思えないほどの強い力で、子供は抱かれていた女の胸を蹴上げた。女は「あッ」と小さく叫んで丸椅子から転がり落ちた。受けとめられた婦長の腕の中で、子供はこの世の終りともいうような叫び声を上げて泣きわめいた。なるほど、女は子供の母親ではなかった。女はうろたえ、婦長の手から子供を抱きとると「紀久子ちゃん、紀久子ちゃん」と強い声を出した。頬が桜色に染まっている。

「少し待ちましょう。泣きやむまで」

谷婦長はそう言って、浩太郎へ笑って見せた。その笑いは若くて未熟な医師への嘲いではなく、腕白な弟の失敗を笑うような優しい笑いであった。浩太郎は学生時代からインターン、そして三宅眼科教室に残ったこの四年間、婦長

の谷圭子から有形無形の好意を受けて来た。

谷圭子は浩太郎がこの医科大学に入学した頃、すでに三宅眼科の看護婦として、この診察室に勤務していた。大学を卒業した浩太郎が三宅教授の許しを得て医局に残る決意を固めた時、まっ先に喜び、その決意に力を与えてくれたのは圭子であった。もちろん三宅教授に対する浩太郎の敬慕の念も深かった。ほとんど無給に近い医局員の生活を大学を卒業した後にもつづけてゆくことは、親一人子一人の浩太郎にとって、決して容易な道ではなかった。姉のような圭子の好意がしばしば浩太郎を勇気づけてくれた。浩太郎の課題である弱視研究のデーター作成や、整理にも圭子の援助が必要であった。二人の間にはいつしか医師と看護婦というより深い友情のようなものが生れていた。この半年くらいの間、やっと浩太郎は実際診療を許された。といっても患者の全てを許されたわけではない。ごく簡単な治療と診断を一日に、三、四例許されるに過ぎない。まだ医師の卵である。浩太郎がハンドランプを手にして、患者の眼球を覗きこむ時、圭子はきまっと浩太郎の側近くに立って、その一挙手一投足をみつめていた。それはまるで、初めて己れの力で歩む嬰兒をみつめる母親の期待に満ちた眼であり、自信をもってやりなさいという励ましの眼でもあった。患者の扱いや、咄嗟の処理では医師の浩太郎より、長い間の経験と習練を生かした圭子の処理の方が、はるか

に適切な場合が多かった。まして幼児の診察にはいつも手を焼いた。机の引出しにキャラメルを用意しておくようになったのも圭子の発案であった。

子供はまだ泣きじゃくっていた。浩太郎が机の引出しからキャラメルを出し、圭子がそれを手に掲げた。うるんだ子供の眼がそれを追った。

「弱虫だなあ、紀久子ちゃん……なんにも痛いことしないでしよう」

再びガラス棒を取り上げた浩太郎は、脱脂綿で子供の涙を拭きとった。子供の眼が浩太郎をみつめた。浩太郎は「おやつ？」と思って手をひいた。子供の瞳孔の奥にキラリと光るものを見たからである。

「待てよ」と呟きながら、浩太郎は再び身をのり出して子供の瞳孔を覗きこんだ。子供の顔がニッと笑った。「ばあつ」と浩太郎がおどけて見せた。しかし浩太郎の眼は一点に集中していた。子供が大きく眼を見開いてみせた。

「ちょっと暗室へ行ってみましょう、気になることがあるから」

浩太郎はミドリンを点眼すると、女をうながして立ち上った。

「子供だから、顕微鏡は無理じゃありませんか？」と、圭子が聞いた。

「開眼器をかけて診よう。暴れても、泣いてもしょうがな

い」

浩太郎の聲に、意外に強い響きがあった。圭子は、開瞼器と双眼ルーペを手にして暗室の幕をひいた。三坪ほどの小さな暗室に、細隙燈顕微鏡が二台並んでいる。眼検査に革命的な新時代をもたらしたこの優れた顕微鏡によれば、生体のまま眼底はもちろん、毛細管、細胞、神経までも見透すことができる。しかし幼児をこの器械の前に固定することはほとんど不可能である。あえて顕微鏡検査をするすれば、全身麻酔でもかけて行方より他に方法はない。

浩太郎は、眼底倒像ルーペによる方法で子供の瞳孔を見ようとした。二人の看護婦を呼んで子供の手足を固定させた。子供を抱いた若い女は、蒼ざめた顔で「紀久子ちゃん、紀久子ちゃん」とうわづった声で子供の名を呼びつづけた。子供が悲鳴をあげた。圭子が子供の眼に開瞼器をかけ上下にひき開けた。子供は顔を左右に振った。眼底倒像ルーペを手にした浩太郎が片方の子供の顔をぐいとひねって、その瞳孔を覗きこんだ。

「右へ、もう少し右へ」と、浩太郎は瞳孔を診つづけながら、光源を左右する圭子へ呼びかけた。

前眼部には変化はない。瞳孔の大きさも正常、対光反応もあるようだ。しかし眼底に黄白色の隆起が見える。浩太郎は息を呑んだ。不安が確信になった。脈絡膜側にむかって腫瘍が走り、その上に網膜血管が明瞭に見える。「グリ

オーマだ」浩太郎は興奮した。かつて教場の一角で、この恐ろしい眼病の講義を三宅教授から仔細に教えられたことがある。学術書でも読んだ。ノートを取り、その下へ赤線を引いたこともある。だが、浩太郎は今日始めて生きた素材にぶつかった。いや自分の眼が、それを発見した。浩太郎の興奮と緊張は、次第にこみ上げてくる喜びにかわっていった。これが医師の喜びというものだろうか。浩太郎は自問した。この医局に医師として勤務してから四年、浩太郎は何十人、何百人、何千人という患者に接して来た。眼球を摘出するというような大きな手術にも立ちあい、その助手をつとめたこともあった。危うく失明のがれた患者が教授の胸にすがって泣いて喜ぶ姿も見えた。退院間ぎわの少女が「先生、見えるわよ、見えるわよ」と終日飽かずにハンカチを振っていた姿も、何年かの医師生活の思い出の一つとして残っている。しかし、今日この瞬間まで、浩太郎は医師としての喜びと誇りに触れたことはなかった。少なくとも自分はそう思っていた。

子供の眼底に白く光る短刀のような腫瘍を発見した時、浩太郎の心は躍り、激しく脈うち、あふれるような感動と鋭利な快感を味わった。医師の喜びは、病原の克服ではなく、その発見にあることを、浩太郎はその日、はじめて知った。

「どうなんでしょうか？」

と、子供を抱きなおした女が、喰い入るような眼で浩太郎を見た。

「まだ、はっきり申し上げられませんが、ひょっとすると、悪い病気があるかもしれません」

「悪い病気と申しますと？」

「三宅教授に診断していただきましょう。僕にはそれと言う自信がありません」

「そんなに悪い病気ですか？」

「もしそうだとすればね。このままちょっと待っていて下さい。僕、教授のところへ行行って来ます」

浩太郎は暗室を出た。二階への階段を駆け上った。長い廊下を走るようにして会議室のドアを叩いた。円卓を囲んでいた二十人ほどの教授の顔が一斉に浩太郎を見た。浩太郎は三宅教授の姿を求めた。

「どうしたんだ」と三宅教授が立って来て廊下へ出た。

「先生、さっきの子供ですけど、グリオーマじゃないかと思うんです」

「なに?!」と教授の顔が不機嫌に浩太郎を見た。浩太郎は荒い息を吐いた。

「会議中だと思ったのですけど、僕には診断を下す自信がありませんし、明日は日曜なので、できれば先生に診ていただいて御指示を受けたいと思ひまして」

「そうか、よし、すぐに行く」

三宅教授はいったん会議室に戻ると、すぐに顔を出した。

「子供だと言ったね？」

「はい」

「いくつだ」

「三ツです」

「三ツか……顕微鏡検査は無理だな」

教授と浩太郎は暗室へ急いだ。浩太郎が暗幕を引いて教授を迎え入れた時、子供は反射的に大きな泣き声をあげて若い女の胸の中でもがいた。再び同じ操作が繰り返えされ、子供は割れるような叫び声をあげた。

双眼ルーペをかけた三宅教授が、じっと子供の瞳孔を覗きこんでいる。教授の横顔をみつめる浩太郎の顔には、自信と期待が色濃く浮き出している。泣き疲れた子供がぐったりと緊張を解いた。三宅教授のルーペは、なおも執拗に子供の眼底を追っている。子供の胸が大きく伸縮した。子供はくくつと噎せ、その口から牛乳色の汚物を吐き出した。三宅教授がやつと身を起した。そして静かにルーペをとりはずした。浩太郎は、まるで自分が患者者でもあるかのように、不安な思いで教授の宣告を待った。

「グリオーマだな。確かに」

「やっぱり、そうですか」

「よく見つけたよ。早く発見できてよかった。手術しなくちゃならないが、そのことを君からよく話してくれ」

「僕が、ですか？」

「こういう病気をどういふ風に話すか、それも勉強の一つだよ。私は教授会に戻るからね」

双眼ルーペを圭子の手に渡すと、三宅教授は静かに暗室を出て行った。子供はもう抵抗する力もなく若い女の胸に顔を埋めていた。

「診察室にお戻りになって下さい。先生がお話なさるそうです」

暗幕を左右に開いた圭子が、女に呼びかけた。異様な空気が事の重大さを女に知らせた。女は祈るような眼で浩太郎の前に腰をおろした。浩太郎は言った。

「子供さんの病気は網膜神経腫（まなまくちしゅ）といって非常に悪質な病気です。言ってみれば癌のようなものです」

「……………」

「不幸にして子供だけに発見される病気ですが、どうしてもこういう腫瘍が子供だけにできるのか、原因はまだ分っていません。分っていることは、このまま放っておくと腫瘍が眼球の全部を犯し、さらに転移して、脳に侵入することがあるということです」

「さきほど、癌のようなのだとおっしゃいましたけれど……………」

「ええ。それは手術以外に、子供さんを救う道はないという事です」

「手術といいますと……………」

「眼球摘出です。悪い方の眼をとってしまうのです」

そこまで、浩太郎はすらすらと言った。敢て事務的な物言いをした。

女の顔はみるみる蒼ざめ、女は子供を抱きしめたままうつぶいた。沈黙のままある時間が過ぎた。しかし女は顔を上げようとはしない。その姿は必死に、なにかに耐えているようであった。

「手術は一日も早くしなければならぬでしょう。一日遅れれば、それだけ危険が近づいてくるのです」

浩太郎は決意をうながすように言った。女がやっと顔を上げた。浩太郎は眼を瞠（はな）った。女の両眼には一杯の涙が光っていた。

「可哀そうな紀久子ちゃん……。先生、他に方法はないのでしょうか。この子は女の子です。眼を取ってしまうなんて……。私だったら死んでしまいます」

「眼球を摘出しなければ、やって来るのは死です」

浩太郎は冷たく言い放った。圭子が驚いて浩太郎を見た。医師にあるまじき若い言葉である。

「待って下さい」と、女は抱いた子供を守るようにして身をよじった。

「父に相談してみます。手術が必要だということは分りました。一日も早くそれをしなければならぬということも

分ります。でも、私にはそれを決定する勇氣がありません。一度帰って、父に相談してみます」

「それがいいですね」

圭子が慰めるように言った。

「あまり突然のことですものね。びっくりなされたでしょ。とにかくお家へお帰りになって。明日は日曜日ですから、ゆっくり御相談して」

「月曜日の十時に、まず小児科の方へ行つて下さい。全身麻酔をかけて手術するから、そこで一般的な診察をしてもらいます。手術は十一時から」

浩太郎は最後の断を下すように言った。そして、野々宮紀久子、三歳と書かれたカルテの余白に、大きな字で「緊急・手術」という横文字を書き入れた。

女が一礼して立ち上った。

風は強いが空は美しく晴れ渡っていた。

野々宮敦子は大学病院前の停留所に立つて電車の来るのを待っていた。敦子と紀久子のほかには人影はなかった。停留所の向うの材木商の前に、真新しい角材を山積みにした一台のトラックが停っている。角材の木肌が、まるで裸体を見るような肉感的な色艶をみせている。敦子はふと、手術台の上に寝かされた紀久子の裸体を思い浮べ、その前にメスを持って立つ浩太郎の姿を思った。「可哀そうな紀

久子……」という思いが、再び敦子の胸をしめつけた。

電車が来た。車内は空いていた。四、五人の客が隅にたたまって腰かけている。敦子は紀久子を抱いて、広い座席の真中にボンと坐った。

「アツコネエちゃん、チンドンヤ、チンドンヤ」

と、窓にしがみついた紀久子が高い声をあげて敦子の手を払いのけた。敦子はふりかえって窓外を見た。白粉を真白に塗った三人の異様な顔が敦子の視野を流れていった。それはサイレント映画を見るように、敦子の視野の外に消えていった。敦子は、紀久子の運命について考えていた。

手術。そして眼球摘出。まだ三歳の紀久子には、それが自分の将来をどのように決定し、どのように運命づけるものなのか、何一つ分っていない。「手術」という言葉の持つ重さや不安さえも知らないだろう。もし自分がこんな病気で眼を失わなければならないとしたら、一体自分はどうするだろう。「私だったら死んでしまします」と口走った先刻の言葉は、何の解決にもならないのだ。己れの無力さを知らされるだけだ。敦子は、無心に窓外をみつめる紀久子の瞳を、恐る恐る覗いて見た。誰が見ても、単なるものもらいだ。腕白な子供たちによく見かける病氣だ。その底に癌のような恐ろしい病巣がひそんでいるとは思えないほど、その黒い瞳は、はっきりと視点をとらえて動いている。屏風ヶ浦の停留所で敦子は電車を降りた。埃と砂とを混

えた強い風が、海の方から吹き上げて来る。二年程前からはじめられた干拓事業は、その八分通りが完成し、かつて美しい海だったその場所には、赤土と塵埃が、小高い山を作っている。歴史は醜い。敦子はそう思った。まだ自分たちが小学生の頃、この海辺には松の木が生え、小舟がつながれ、砂浜には美しい色豊かな貝殻がいくつも転がっていた。夏季には臨海学校の海水浴場となり、冬季には一面に張りめぐらされた旗に、漆黒の海草が、漁師たちのひび割れた手を待っていた。敦子は当時の風景を思ってしまった。干拓で造成された土地肌には、荒廃と死の黒いかげが見えた。不気味で醜悪であった。敦子は遠い紀久子の未来を思った。紀久子は敦子の背で意味のわからぬ歌謡曲の一節を口ずさんでいた。

山の崖下に敦子の家はあった。百二十機に及ぶB29の来襲を受けて、横浜市が一瞬にして焼野原となった時、この磯子区の一画だけは幸運にして焼け残った。山と海の境にあって、爆撃をまぬがれたという人もあるが、このあたりは戦前、ささやかな漁村であって爆撃する価値もなかったようだ。古びた家々の路地をぬけて、敦子が生垣の庭木戸を押した時、父は庭に立って落葉を燃していた。庭木の幹入れでもしたのだろうか、藁くずが散乱し、数本の樺の幹に藁束が巻きつけられている。

「敦子かい？」

と、父が顔をめぐらせた。

「ただいま」

敦子は、背中の紀久子をそこにおろすと、落葉の山をはさんで、父と顔を見合わせた。

「どうした？」

「……………」

「ものもらいだらう？ やつぱり」

父は、縁先を駆け上る紀久子の後姿を見ながら笑った。

敦子は父をみつめた。病名を告げ、その処理をどう喋ったらいのか、敦子には見当がつかなかった。迷った。しかし言わなければならぬ。例え父がどのように悲しもうと。「どうしたんだ敦子、何かあったのか」と父は再び言った。敦子は息を飲んだ。そして思いきって吐き出した。

「お父さん、紀久子の眼は、手術しなくちゃいけないんですって」

「手術？」

「それも簡単な手術じゃありません。紀久子の眼は網膜神経腫という恐ろしい病気なんですって……………」

「まさか、失明するようなことはないんだろうな」

「……………」

「どうなんだ」

「お父さん、紀久子の眼は、もう駄目なんです」

「駄目って…………どう駄目なんだ」

「手術してとってしまわなければ」

「なに、眼をとる？ 両眼か？」

「いいえ、悪い方の眼だけです。でも、それ以外に方法はないと、お医者さんは言うんです」

「……………」

「摘出しなければ、その病気はどんどん悪くなって、しまいには脳に移って死ぬと言うんです」

「……………」

「手術は一日も早くしなければならぬそうですが、私はお父さんに相談してからと言って帰って来ました。どうしましょう」

「どうするって……お前」

父は絶句した。

敦子は逡巡した。病院の診察室を出てから、ここまでの間、考えては打ち消し、打ち消しては考えつづけて来た一つの意見を、敦子は言わなければならなくなった。

「お父さん、これは飽くまで一つの意見だとして聞いて頂戴。私、^{非道い}ことを言うわよ。でも怒らないで最後まで聞いて欲しいの。お医者さんが眼をとらなければ死ぬと言った時、私は、私だったら死んでしまいます、そう言ったのよ」

「……………」

「紀久子はまだ三ツの子供です。この世に生れて来たこと

が、喜びであるか苦しみであるか、紀久子はまだ、それを知らないわ。眼をとってしまった紀久子の将来について考えてやることのできるのは、お父さんと私だけだと思うのよ。紀久子は女の子です。女の子の幸せは結婚して、母親になることだと私は思っています」

「そればかりが人間の幸福ではないだろう。世の中には生涯結婚しない人だって、たくさんいるよ」

「かりにお父さんの言う通りだとしても、紀久子は人生の出発点から大きな重荷を背負わなければならないでしょう。……小学校へ上れば、一ツ目小僧なんて言われて、きっと友達から嘲^{あざわら}われるわ。中学校から高等学校。そして大学へ行ったとしても、紀久子は、そのもっとも美しく楽しいはずの青春時代を苦しみの中で生き抜かなければならないでしょう。お父さんや私たち姉妹が、どんなに紀久子に同情しても、紀久子の苦しみを救ってやることはできないと思います。その時、紀久子は言うでしょう。何故こんな不具者を生んだのって……」

「お前は何を言おうとしているんだ」

「私だったら、死んでしまいます」

「お前は紀久子を殺せというのか？」

「助かる生命なら助かるでしょう。でも、片眼をとってまで、あの子の生命を助けるということが、本当の愛情なのかどうか、私にはわからないのです。私は紀久子が可愛い。

母親のない紀久子を今日まで育て上げたのは私です。生みの母親だったら、恐らく、こんなことは口が裂けても言わないでしょう。しかし私は考えてみたいのです。母親や姉妹としてではなく、人間として……」

「敦子、お前は間違っているよ。本当の愛情とは、そんなふうに理屈で割り切れるものではない。もしお母さんが生きていたら、自分の健康な眼と、紀久子の眼を取り替えてやりたいというだろう」

「気持ちだけだったら私にもあります。でもそういう気持ちだけでは何も解決しないのです」

「では、こういうふうには考えられないかね。人間というのは偉大なものだ。それは人間の歴史をふりかえってみれば分る。紀久子も、その人間の一人だというふうに」

「私だって、人間の可能性を信じないわけではありません。でも、紀久子が将来ぶつかる苦しみを、私には想像ができませんのです」

敦子は、今年の春、山下公園の突堤から身を投げて自殺した先輩の若林君子の身の上を思い浮べた。君子の三十四年の生涯を決定したのは、君子が戦争中、横須賀の海軍追浜工場で失った二本の指であった。君子は当時、学徒勤労報国隊の一人として、その工場で三十ミリ機関砲の組立作業に参加していた。作業は昼夜の別なくつづけられた。ある日、突如空襲警報が鳴った。報国隊の学徒は逃げおくれ

た。横穴式の防空壕へ飛びこむ時間さえなかった。直撃弾が工場を破壊し、三人の学徒が死んだ。その空襲で、君子は右手の拇指と人差指の二本を失った。名誉の負傷だと監督官の海軍中尉から賞状を受けた。しかし、敗戦と同時に君子の名誉の負傷は不具者という汚名に転落した。君子はその手を人前に出すことを恥じ、青春をその手のために失った。君子は、自分の手に集る好奇の眼を恐れるあまり、人を避け、人をしりぞけた。そして、孤独の中で死を選んだ。敦子は、指二本のために死を選んだ友の心中を思った。そして、片眼を失うであろう紀久子の未来を思った。片眼を摘出することによって、紀久子の生命は生きのびるだろう。しかし、五歳になり、七歳になり、紀久子が自分というものを知った時、その瞬間から、紀久子の死がはじまる。それは疑いもない事実だ。敦子は閉ざされた紀久子の暗い青春を思った。

父は黙念と考えこんでいる。

落葉がパチパチと火をあげた。一条の煙が父と娘の間を流れた。無心な紀久子は縁側で人形を相手に遊んでいた。人形の眼を手でつまんで紀久子が言った。

「オメガワルイデスネ」

浩太郎と婦長の谷圭子は、伊勢崎町のあるビヤホールにいた。明るいシャンデリアの下で、二人は上気した顔を見

せて、激しく議論をたたかわせていた。診察室で「死」という言葉を使った浩太郎の「若さ」と「不用意」を、圭子は医師として完全に失格だと、浩太郎をなじった。浩太郎には、網膜神経膠腫という、ほとんど偶然にしか発見されない病巣を発見した興奮がまだ強く尾をひいていた。

「しかしね、谷さん……」と、浩太郎は唇についたビールの泡を、横なぐりに拭きとって言った。

「死という言葉を使ったことは、確かに悪かった。しかしだよ、死という言葉を使わなかったら、あの患者は二度と病院に来ないかも知れない。病院へ来る来ないは問題じゃないけれど、一日放置しておけば、それだけ悪化することがわかってる病気を眼の前にして、医師として取るべき態度は、一日も早くその病根をとり除いてやることだ。生命にかかわる問題だから、僕はあえて死という言葉を使っただけだ」

「あなたのいうことにも一理はあるわ」

圭子は病院の外では、浩太郎のことをあなたと呼んでいた。病院内では若き医師と看護婦という規律を、ことさらに厳格に守る圭子であったが、病院の外では、圭子は浩太郎の姉のような口をきいた。

「でもね、三宅教授が言ったでしょ。こういう病気を、患者にどう伝えるかということも勉強の一つだって……」

「だから、僕は単刀直入に言ったんだ。病人にとって、病

名とその状態を知らさなかったり、わざとぼかしたりすることは、決していい結果をもたらさないと、僕は思う。……同情や、おもしろいは、かえって医師への疑問や不信となって戻って来るよ」

「あなたがどんなに自分の立場を主張したって、私は納得しないわ。医師が死という言葉で口にするのは、敗北を意味すると思うの。医師にとって死という言葉は禁句だわ」

「それがセンチメンタリズムだということに、どうして気がつかないんだ。死という言葉は敗北ではなくて、医師の闘争心をかきたてるエネルギーだと、僕は思う」

「医師はエンジニアではないわ。人間ドックなんていう、馬鹿馬鹿しい言葉が流行しているけど、医師に一番必要なものは、いつも生きている人間の前に自分は立っているという理解と自覚だと思うわ。あなたにはそれがないわ。眼の玉ばかり見て、人間が見えないのよ」

「僕は眼科医だ。精神科の医者じゃない。僕の使命は、どうして眼病を絶滅するかということだ。そのためには冷酷な科学者の眼が必要なんだ」

「眼の玉は、網膜や角膜や水晶体でできているんじゃないわ。眼は人間の生命だわ。それがあなたには分っていないのよ。だから、簡単に『眼球摘出』などという言葉があなたの口から出るのよ」

「現在の医学では、眼球摘出以外に、あの子の生命を守る

方法はないんだ。愛だとか、理解だとかいう言葉の入りこむ余地はない。だとすれば、その事実を、事実として告げる以外に何をしろというんだ」

「あなたはグリオーマを発見したことに酔っているわ。もちろん、それは立派なことよ。そういう大きな病巣を学究の初步に発見したということは、これからの、あなたの長い医師生活に偉大な記録として残るでしょう。あなたはきつと、グリオーマと書いたあの病院のカルテを、額に入れてあなたの書斎に飾るでしょう。そして、その手術の状況を手柄顔に後輩に話すでしょう。それは決して悪いことではないわ。でも、あなたがもし、眼球を摘出された子供の運命や未来について、微塵も考慮を払わないとしたら、あなたはただの科学者であって、人間らしい医師とはいえないでしょう」

圭子は論すように言った。そして弟を見るような眼でにっと笑った。しかし浩太郎は笑わなかった。テーブルに身をのり出すと、挑むように言った。

「医は仁術だという不埒な思想が、日本の医学をいかに毒したか、君は知らないんだ。子供の運命が例えどうあろうと、僕たちは摘出した眼球を切りきざんで、その病巣をさぐり、それを克服し、それを死滅させなければならぬんだ。その、一見残酷ともみえる行為の中に、医師の使命と責任があるんだ」

浩太郎は自分の言葉の中にあせりのようなものを感じた。論旨は間違っていないはずだ。しかし、圭子を説得するには、まだ経験による確信が足りなかった。浩太郎は口をつぐんだ。

「出ましよう」

圭子は伝票を持って立った。

「いや、それは僕が……」と、浩太郎は圭子の前に、立ちふさがるようにして立った。

「いいのよ、あなたの今日の発見のために、奢らせていただくわ。記念にね」

圭子は、そう言うとき浩太郎の腕の下を、するりとくぐりぬけた。その瞬間、浩太郎はねじ伏せてやりたいような怒りを衝動のように感じた。

二人は沈黙のまま、馬車道の停留所まで歩いた。本牧行きの電車が来た。車内は混んでむし暑かった。胸をあわせるようにして、浩太郎と圭子は立っていた。圭子は故意に視線をはずしていた。浩太郎は圭子の横顔を眺めた。一杯のビールに酔ったのか、圭子の頬はうすあかく染まり、伏せた瞳は力なく一点をみつめている。小鼻のくぼみに白粉がむらになって浮んでいる。診察室や研究室でみせる繊細で女らしい神経は、この顔のどこにかくされているのだろう。どうしてこの人は結婚しないのだろう。浩太郎は、圭子と噂のあった病理学の柴田教授を思った。白髪の柴田教